



四日目の朝。

扉に寄りかかって眠っていたのに、いつのまにか床に寝転がっていた。

雨が止んでいることに気がつき、ちょっとだけ痛い体を起こして外へ出る。

ふもと
麓へつながる唯一の道が、土砂や倒木でふさがっていた。

急いで小屋に戻り、扉をノックする。

「やっぱり土砂崩れでした」

「そっか」

「どうしよう、困ったな」

それは、小さな独り言だった。

扉から離れ、いつものように朝ご飯を作ろうとしたとき、背後で音がした。

振り返ると扉がゆっくりと開いていき、中から——やせ細った男性が出てきた。

「スマレ……？」

「スマレじゃなかったら、僕は誰なんだろうな」

「ふふ。——やっと、顔が見られました」

「お互いにね」

スマレが少しだけ口角をあげて言った。

その様子に、私もつられて笑ってしまうのだった。





マリーとともに外へ出て、道を確認する。

「開通には時間がかかりそうだ」

「幸い、数日過ごすだけの食料はありますが……。こんな山奥だと誰も気づかないかもしれないですね」

「撤去は僕がやる。部屋と食事の恩を返させてほしい。この道がふさがっていたら、困るだろう」

「……はい、困ります。でも——」

「ああ、心配しなくてもこれを片づけたら出ていくよ」

「そうじゃなくて！ この量を一人でやるんですか？ 絶対に無理です。倒木だって混ざってるし」



「肉体労働は得意なんだ」

そう言うと、心配が混ざる瞳でじっと見つめられた。
僕はため息をつき、土砂崩れに向かって歩いていく。
そのまま手前に転がっている倒木を掴み、力任せに引きずって端に寄せた。

「ほら、なんとかなる」

「スマレ！ さっそく手にけがしてますよ！」

倒木を無理やり引きずったことで、折れた枝が手の甲をかすめたのだろう。





赤く線が引かれ、少しだけ血が流れた傷は——すぐに消えてなくなった。

「……あれ？ たしかに傷があったのに」

「君は中に戻っていて。できれば、あのスープをつくってほしい。作業終わりに飲めたらうれしいから」

「スープは作りますけど！ そうじゃなくて、傷は？ それにその筋力、ふつうじゃないです」

「……僕は。僕は、そう、ふつうじゃない。魔法をかけられたから」

「どういう、ことですか」

ざあ、と木々が揺れる。

戸惑いをみせるマリーから、僕は、視線を逸らした。





「作業に移るよ。危ないから君は小屋に戻って」

そういうと、マリーはいまだに戸惑いをみせていたが、早足で小屋へ戻っていく。

魔法がかけられた人間なんて気味が悪いよな。





朝も昼も食べずに、夜までずっと撤去作業を続けていると、
マリーが夜食を持ってやってきた。
なんだか、怒っているようだ。

「せめて夜ご飯は食べてください！」

「わかったよ……」

「スープ作って待っていたんですよ！」

「ごめん」

「謝るなら食べてください」

「……うん」

彼女の力強さに押され、僕はその場で夜食を食べた。

「まだ、やるんですか？」

「もう少しだけね」

「私もなにか手伝いましょうか？」

「眠ってていいよ。うるさくしないように気をつけるから」

「……せめて休憩は取ってくださいね。入ってすぐのテーブルに果物がありますから食べてください。それじゃあ、おやすみなさい」

そして、マリーは小屋へ戻っていく。

小さな背を見届けたあと、作業を再開させたのだった。

